© J.LEAGUE PHOTOS

Interview
インタビュー

Jリーグ
オフィシャルスポンサー
東京エレクトロン株式会社の
竹中博司代表取締役社長に聞く

「Jリーグのような フェアプレー精神で、ゴールを目指す」

ことしから新たにJリーグのオフィシャルスポンサーとなった東京エレクトロン株式会社。半導体製造装置のトップメーカーを率いる若きリーダーに、サッカーとの関わりなどを大いに語ってもらった。

※このインタビューは2011年7月に実施しました。

世界という土俵の上で競争

―― 半導体製造装置の国内最大手ということで、まずは事業内容を簡単にお話しください。

竹中 半導体という言葉は、聞かれたことがあるかと思います。携帯電話やパソコン、テレビ、自動車などに使われており、今やそれなしには生活や社会インフラが成り立たないほどで、昔から「産業のコメ」とも言われています。半導体を作るには装置が必要で、それが半導体製造装置。弊社は創業以来、来期で50期を迎えます。もともとはアメリカで生まれた技術で、私どもは技術専門商社としてハイテク技術の販売および技術サービスから始めました。その後、半導体製造装置へのさまざまなニーズが高まり、単なる販売代理店では十分なサポートができないと考え、次第にメーカーへと業態を転換していきました。現在はメーカーとして製品を作って納入し、サービスも含め全てを行っています。

―― 海外にも広く進出しています。

竹中 日本で立ち上がった半導体技術は、次第に韓国、台湾、中国などアジアへ広がっていきました。作った装置を輸出しなければならず、欧米を含めた世界中に販売網を広げる時間が、10年ほど必要でした。現在売上高で世界のトップ5に入っているのは、日本では弊社だけで、優れた技術力を持つ欧米の企業としのぎを削っています。

―― 半導体以外には。

竹中 事業の約8割は半導体ですが、これまでに培った技術を生かし、テレビの液晶画面などに使われるフラットパネルディスプレイ製造装置も手掛けています。また、今後は太陽電池製造装置にも力を入れていこうと思っています。

―― 創立から約50年、竹中社長も40代で就任するなど、「若さ」「積極的なチャレンジ」というイメージが強い会社です。

竹中 半導体業界は技術革新が日々激しいので、年齢が若いかどうかは別にして、気持ちの若さは必要かと思います。

―― 開発が非常に重要ですね。

竹中 サッカーもフェアプレーを目指していますが、われわれの業界もフェアで、技術力が高いほうが勝ち、劣ったほうが負けと、勝ち負けがはっきりしています。あしたも同じものを作っていたら勝てない、あしたは違うものを作らないと勝てず、抜きん出たものの勝利となります。頼れるのは技術力だけです。これは非常にフェアで、国境もなく、世界という土俵の上での競争です。

まず、社員のためになれば

―― 2006年からヴァンフォーレ甲府のユニフォームスポンサーを続けています。山梨県には事業所や工場があり、地域密着型のホームタウン構想に強く共感したということですが。

竹中 山梨県はサッカーが盛んな土地柄です。社員は地元のクラブとして応援しています。例えばユニフォームの背中を見て「お父さんの会社だぞ」と言って、家族が一体となって応援します。サッカーというのは、ボール1個で団結できるスポーツ。ヴァンフォーレ甲府に協力させていただいて、社員がこんなにも盛り上がるという実感がありました。

―― Jリーグのオフィシャルスポンサーとなって、社員や周囲の反応はいかがでしたか。

竹中 最初は「うちのような業種の会社がJリーグのオフィシャルスポンサーになれるのか」と、驚かれましたね。いい意味で驚いた方は多いと思います。でも、社員は誇りに感じ、喜んでいると思います。

―― Jリーグについては、どのような印象を持っていますか。

竹中 フェア、若々しさ、すがすがしさ、地域に根差して発展するなど、われわれの感覚と近

いものがあります。みんなで支え、みんなで盛り上げ、そして結果をみんなで享受しようという姿勢があります。弊社もJリーグのようなフェアプレー精神で、ゴールを目指す。競争相手である欧米勢は強力ですが、そこに伍してやっていかないと。

―― 最近はテレビのコマーシャルでも、よく見掛けるようになりました。

竹中 弊社は産業用機械を扱っているので、どんなに宣伝しても、弊社の商品が売れるわけではありませんが、わたしはまず、社員のためになればと考えています。Jリーグもそう。試合に行くと、広告看板やユニフォームの背中に会社名が出ている。誇りを感じるとか、それを見て頑張ろうとか、それで十分だと思います。また、入社したいと考える学生が多くなるかもしれない、ということもあります。

―― 製造装置というと、一般の人々にはあまりなじみがないでしょうね。

竹中 製品が皆さんの前に登場したり、手を触れる機会も少ない。しかし、等身大の程度には弊社を知っていただきたいし、また、知られることによって、さまざまな批評、評価を受けることになるでしょう。そういった刺激を受けることによって、もっと頑張ろうとか、変わっていこうと思うようなエネルギーが湧いてくれば、十分に価値があると思います。わたしは昨年の秋から社内ブログを始めたのですが、社員からコマーシャルなどについても、期待以上の反応がありました。

盛り上がりを支えるJリーグ

―― Jリーグオフィシャルスポンサーとして、今後はどのような活動を考えていますか。

竹中 サッカースクールなど、子どもたちが集まるところで「サッカーを科学する」といったテーマのイベントなども企画したいですね。弊社としては、理科好き、科学好きな子どもたちが増えてほしい。子どものときから理科の面白さを伝えていきたいと思います。

―― 竹中社長ご自身のスポーツとの関わりについては、いかがですか。

竹中 小学校からは野球をやっていましたが、高校、大学ではサッカーをやっていました。この体格から「ゴールキーパーですか」と聞かれるのですが（笑）、フォワードでした。入社したとき、本社にサッカー部がなく、好きな人が集まってチームをつくりました。府中市のリーグで3部から1部に昇格し、当時は「それで、読売サッカークラブ（現 東京ヴェルディ）とはいつ対戦するの」などと聞かれたものです（笑）。今はプレーしませんが、見るのは大好きです。

―― 当時からサッカーを取り巻く環境も大いに変わりました。

竹中 ＦＩＦＡワールドカップなど、日本代表の試合の盛り上がりは、本当に素晴らしいですね。あれほど日本中が一つになって盛り上がるということは、めったにありません。国民的行事といっていいかもしれません。そこで、これが何によって支えられているかとたどってみると、Jリーグの日ごろの活動に行きつくと思います。国際試合の盛り上がりは、20年間にわたって地道な努力を続けてきたJリーグの成果であると思っています。今後もJリーグで日本サッカーが盛り上がり、日本代表がＦＩＦＡワールドカップでベスト4ぐらいに進む。これが夢ですね。

―― 竹中社長は「石の上にも十年」という言葉を使っています。

竹中 技術開発は3年ぐらいで判断するものではなく、もう少しじっくりと見るべきものだと思っています。開発に携わっているメンバーに信念と、もっとやっていけるという強い気持ちがあれば、なるべく続けさせてあげるべきです。それを「石の上にも十年」と表現しました。もちろん、うまくいかないときには、縮小したり、やめることがあるかもしれませんが、技術を3年で判断していくというのは、あまりにも短い。Jリーグも20年間の努力で、ここまで発展したのですから。

東京エレクトロン とは

東京エレクトロンは、半導体製造装置のリーディングサプライヤーとして幅広い製品分野の開発・製造・販売を行っています。また、半導体製造装置の分野で蓄積した専門技術を生かして、フラットパネルディスプレイ（FPD）製造装置も手がけています。そして、これらの半導体製造装置およびFPD製造装置の多くは、世界市場で高いシェアを獲得しています。

東京エレクトロンは、アメリカ、ヨーロッパ、アジア各国に展開しているグローバル拠点網を通して、優れた製品とサービスをお客様に提供しています。

（東京エレクトロン株式会社ホームページより）

甲府のユニフォームスポンサーは2006年から続けている

Jリーグのフェア、若々しさ、すがすがしさ、地域密着といったイメージは「われわれの感覚と近い」と竹中社長

竹中 博司（たけなか ひろし）

1961年2月5日生まれ
慶應義塾大学工学部卒（1984年3月卒）
《主要略歴》
1984年 4月 東京エレクトロン株式会社入社
2001年12月 枚葉成膜部長
2002年 4月 枚葉成膜BUGM（ビジネス ユニット ジェネラルマネージャー）
2003年 4月 執行役員
2005年 4月 サーマルプロセスシステムBUGM
2006年 4月 SPE-3 事業部 副事業部長
2007年 6月 取締役 常務執行役員
2008年10月 SPE 第2 事業本部長
2009年 4月 代表取締役社長（現任）
《出身地》東京都

Report
リポート

Jリーグ百年構想

Jクラブと歩む「地域」「ひと」

13 湘南ベルマーレ

地道な地域貢献活動のサポート役に名乗り。ホームタウンを意識し、クラブと連携

バージョンアップした巡回授業

湘南ベルマーレの「小学校体育巡回授業」は、2001年にスタートした。初年度は64校、6,700人の実績だったが、昨年の2月には指導を行った児童数が10万人を突破し、10年度には延べ参加校数が1,000を超えた。同年度には平塚市、小田原市など湘南のホームタウン10市町にある小学校のうちの8割以上となる139校（延べ参加校は151校）に足を運び、1万5000人を上回る児童が指導を受けた。まさに地道で、息の長い地域貢献活動といえるだろう。

「正規の授業でボール運動を教える」というこの巡回授業は、11年目に入ったことしから「サッカーの楽しさだけではなく、ライフスキルや思いやり、コミュニケーションなどを伝えて、心に残るものにしたい」と内容をバージョンアップするとともに、より地域と連携した取り組みをスタートさせた。そんな動きの中でスポンサーとしてサポート役に名乗りを上げたのがJAあつぎ（厚木市農業協同組合）だ。

井萱修己代表理事組合長は「常々、社会貢献活動をやっていきたいと思っていた。特に子どもたちへの活動ですね。基本的な考え方がベルマーレさんと一致し、賛同しました。わたしたちは農業を軸とする地域協同組合を目指しています。よい地域、暮らしやすい地域をつくるのが本来の目的で、その一環として子どもたちにも農業や食に対する理解を深めてもらうとともに、健全な成長を願っているのです」と、その狙いを語る。

井萱修己氏

6月27日には、厚木市の玉川小学校で巡回授業が行われた。あいにくの梅雨空とあって体育館での授業となったが、胸に「JAあつぎ」のロゴの入ったカラフルなビブスを着けた男女40人の元気な声が館内に響き渡り、笑顔が広がった。授業参観の保護者の姿もあった。ボールを使って体を動かしたり、鬼ごっこを取り入れた運動から入り、サッカー特有の足の使い方や、基本技術の体験。最後は試合形式で、児童に練習の成果を感じさせていた。男子と女子をそれぞれ1人のコーチが指導。子どもたちとコミュニケーションをとりながら、あっという間に45分間の授業が終わった。

11年目に入った巡回授業は内容もバージョンアップ。より地域と連携した取り組みもスタート

できることで応援していく

地域密着型の総合スポーツクラブを目指す湘南ベルマーレでは、NPO法人「湘南ベルマーレスポーツクラブ」を立ち上げ、ソフトボールやビーチバレー、トライアスロン、フットサルのチームも編成している。厚木市はソフトボールの盛んだったところで、JAあつぎはもともとソフトボールを通じて湘南ベルマーレとつながりが深かったそうだ。そんな中から昨年夏にはソフトボール教室が開催され、同12月には湘南のフィットネスコーチが講師となった「健康セミナー」が行われた。

ホームタウンの一つである厚木市内の商店街に掲げられたクラブのフラッグ ©湘南ベルマーレ

そして、ことし1月に湘南の選手・コーチが参加して「ふれあいサッカーフェスティバル」が開かれた。子どもたちと、その保護者180人余りが参加し、ミニゲームや実戦的な技術を学ぶレッスンなどで大いに盛り上がったという。また厚木市内の商店街にフラッグを掲げるプロジェクトも進んだ。計画の推進役、JAあつぎ総合企画部企画課の大矢和人課長は「サッカーは人気がある。厚木市も（湘南の）ホームタウンなので、厚木でできることで応援していきたい」という。

大矢和人氏

巡回授業の最後に児童に手渡された「湘南ベルマーレ新聞」には、「フードマイレージってなに?」という地産地消を子どもたちに分かりやすく説明したコラムが載っていた。「農協では生活に関わることのすべてをやっている。幅広いスタンス。子どもたちや若いお母さん方がすごく大切なんですが、まだまだアピールが足りない。ベルマーレと連携し、歩んでいきたい。今後も知恵を出しながらいろんな取り組みをやっていきたい」と井萱組合長。ホームタウン厚木を意識した活動は、さらに広がりを見せていくはずだ。

（共同通信社　後藤　英文）

「豊かで充実したスポーツ環境を実現し、地域に根差したスポーツクラブを中心に、日本にスポーツ文化を育む」ことを目指す「Ｊリーグ百年構想」のもと、Ｊクラブはそれぞれのホームタウンを中心に、さまざまな取り組みを行っている。そして、Ｊクラブの存在、活動は、地域とそこに暮らす人々に影響、刺激を与え、新たなムーブメントを生んでいる。Ｊクラブと手を携えながら、ともに歩む人々や、その活動を紹介するこのシリーズ。今号では湘南ベルマーレ、ＦＣ岐阜と連携した地域の取り組みにスポットを当てた。

スポーツで、もっと、幸せな国へ。 J.LEAGUE 百年構想

14 ＦＣ岐阜

クラブの地域貢献活動と連携し 子どもたちが元気に、地域が生き生きと

ホームゲームが行われる岐阜市を中心とした岐阜地区をはじめ、西濃地区、中濃地区、東濃地区、飛騨地区で構成される岐阜県。ホームタウンが広大であるゆえに、FC岐阜を取り巻く環境は厳しい。特にチームの認知度の向上、ファン・サポーターの拡大には障害の一つとなっている。

その障害を、取り払う役割が期待されているのが地域貢献活動。昨年度は、Ｊリーグが行うホームタウン活動調査によればＪリーグ最多の459回行われ、地域密着型の県内全域から愛されるチームを目指している。

体を動かす楽しさを感じる

県内のほぼ中央に位置する郡上市。毎年お盆に「徹夜踊り」が行われる郡上八幡など県内有数の観光スポットである上、清流・長良川の源流地があるなど緑豊かな地域として知られる。

ＦＣ岐阜の地域貢献スタッフが同市を訪れたのは5月末のこと。市内中心部から車で15分ほど離れた郡上市立西和良小学校を訪れた。全校児童が13人と小規模校ながら「本物に触れる」を理念とし、プロの音楽家によるアフリカン音楽のコンサートを開くなど特色ある教育を推進している同校。

今回は、クラブが県から委託を受ける「スポーツを楽しむ子どもを育てよう推進事業」に則したスポーツ教室を行った。

川尻弘美氏

企画実現の立役者が、同校の川尻弘美教頭。「スポーツ教室の準備をするクラブスタッフの様子を窓から見ていた子どもたちが、われ先にと校庭に飛び出していったのには驚いた」と振り返る。

スポーツ教室は、同校が小規模校ということもあり、1年生から6年生までの体力がさまざまな児童が相手。それでも「全ての子どもたちが興味を示して、一緒に体を動かしたくなるようなメニューを考えていただいた」と川尻教頭が話すように、サッカーをはじめ、鬼ごっこ、ボール運び競争など多岐にわたる種目が行われた。「児童全員が、体を動かすことの楽しさを感じてくれた」とその効果を実感する。

「ボールを追う子どもたちの顔は、真剣そのもの。スポーツ教室以降も、児童は昼休みなどでサッカーをするようになった。家族でFC岐阜の公式戦を見に行った子もいます」。地域貢献活動の積み重ねが、着実に新たなサポーターの獲得につながっている。

環境学習と地域活性化

西和良小学校での地域貢献活動は、スポーツ教室にとどまらなかった。校庭から戻った児童とクラブスタッフは、教室で「郡上の山を守ってゆくために何をしたらよいか」をテーマにした環境学習を受けた。この授業は市内の山々に植えられている「郡上スギ」の間伐材を使った「郡上わりばし」を、市内の小中学校や飲食店などに1万膳配るPR活動の一環で行われた。「なぜ地元産の割り箸が配られるのかを、子どもたちに環境学習を通して分かってもらいたい」という川尻教頭らの願いで実現した授業だった。

割り箸の最大の売りを「地産地消の商品である上、間伐材を使うことで地域の山の健全な森林形成も保たれる」と語るのは、環境学習の特別講師を務めた「郡上わりばしプロジェクト実行委員会」の小森胤樹事務局長。市場に大量に出回る中国産の割り箸よりも値は張るものの「スギ本来の香りが感じられる商品。この割り箸が定着すれば、地域活性化にもつながる」と力説する。

小森胤樹氏と箸袋の招待券

クラブは同実行委員会の活動理念に賛同し、割り箸のPRに一役買った。今回配られた特注の割り箸の袋の部分が6月に行われた公式試合の招待券となっていて、その箸袋をスタジアムに持参すれば、1枚につき2人が無料で試合観戦ができるというもの。小森事務局長は「林業とは直接関わりのない一般の方に、魅力を伝えたかった。その上でFC岐阜とのコラボ企画は、PR効果が大きい」とその意義を説く。実際に、配布した約2%に当たる192枚の箸袋が公式試合の入場券として利用され、推定384人が招待された計算になる。小森事務局長は「無料にする企画は当初難しいと考えていたが、快い返事をいただいたクラブに感謝している」と企画の成功を喜ぶ。

この割り箸でのコラボを契機に、協力関係はさらに深まった。例えばホームゲーム開催時に、スタジアム前に立ち並ぶ「屋台村」で提供される食事の割り箸は、郡上わりばしに切り替わった。「これからは、スタジアムに訪れる全国各地のアウェイの来場者の手にも渡って、地元の特産品を紹介できる」と小森事務局長は声を弾ませる。

◇　◆

「地域貢献活動を通して地元密着を目指す姿勢はプロとして素晴らしい」。西和良小学校の川尻教頭も、郡上わりばしプロジェクト実行委員会の小森事務局長も声をそろえる。そのような共感の輪が県下全域に広がり、クラブの活動の原動力となるはずだ。

（岐阜新聞社　富樫 一平）

西和良小学校で環境学習を終え、FC岐阜とコラボした特製割り箸を手にする子どもたち　©ＦＣ岐阜

TOPICS トピックス（6月21日～7月21日）

※各項目の詳細については、Jリーグ公式ホームページ（http://www.j-league.or.jp）を参照

夏休みは、Jリーグへ行こう！ ～2011年夏、Jリーグのスタジアムは楽しさ満載！！～

Jリーグは、「夏休みはJリーグへ行こう！」を合言葉に、今年の夏をより一層楽しんでいただくために、昨年に引き続き「HOTサマーアドベンチャー」と銘打ち、夏ならではのイベントやキャンペーンを実施。対象期間は7月23日（土）～8月28日（日）で、Jリーグ38クラブのホームスタジアムにおいて、家族、友人同士がそろって楽しめる「夏祭り、浴衣、ビアガーデン」といった催しを行う。

「HOTサマーアドベンチャー」対象試合、および各クラブ一押しのイベント、キャンペーンはJリーグ公式ホームページ「HOTサマーアドベンチャー」特設ページ（http://www.j-league.or.jp/hotsa/）または各クラブ公式ホームページへ。

「2011Jユースカップ」大会概要

Jリーグでは10月22日（土）より、ユース年代の選手育成と活躍の舞台となる「2011Jユースカップ　第19回Jリーグユース選手権大会」を開催する。Jリーグの各クラブは発足当時から、日本サッカー協会、日本クラブユースサッカー連盟、地域のサッカークラブ、部活動などとの連携により、地域の育成普及に力を注いでいる。19回目を迎える本大会も、過去に多くの有望な選手を輩出しており、年々その価値を高めている。

2011Jユースカップ 第19回Jリーグユース選手権大会	
開催日	予選リーグ　：2011年10月22日（土）～11月13日（日） 決勝トーナメント：2011年11月20日（日）～12月25日（日）
大会方式	予選リーグはJ1、J2の36クラブ（カターレ富山、ファジアーノ岡山は不参加）を9グループに分け、各グループ内で1回戦総当たりのリーグ戦。その後、各グループ1位の9チーム、2位の成績上位7チームの合計16チームに、日本クラブユースサッカー連盟代表の4チームを加えた合計20チームによるトーナメント戦を行う。

サッカーを科学するサイエンスイベント「親子で学ぶサイエンスサッカースクール」に協力

Jリーグは、Jリーグオフィシャルスポンサーである東京エレクトロン株式会社が主催する、サッカーを科学するイベント「親子で学ぶサイエンスサッカースクール」に協力する。本イベントは小学4～6年生の児童とその保護者が対象。サッカーのプレーを科学する「科学実験プログラム」と、国立競技場のピッチ上でJリーグOB選手の北澤豪氏、岩本輝雄氏とサッカーを楽しむ「サッカー体験プログラム」の2部構成で8月20日（土）に開催される。

U－16・U－15・U－14・U－13 2011Jリーグ選抜を海外キャンプに派遣

Jリーグは、8月から9月にかけてU－16Jリーグ選抜およびU－14Jリーグ選抜をオランダ、U－15Jリーグ選抜をブラジル、U－13Jリーグ選抜を韓国にそれぞれ派遣し、海外キャンプを実施する。

海外キャンプは、Jクラブのアカデミーに所属する選手から選抜し、国際試合の経験を通じて競技力向上の機会を与えるだけでなく、海外文化に触れ現地の人々と交流する経験を通じて豊かな人間性を育むことを目的としている。なお、今回の派遣に際し、アディダス ジャパン株式会社よりユニフォームなどが提供される。

第15回電動車椅子サッカー関東大会を後援

Jリーグは7月19日に開催した理事会で、9月4日（日）に熊谷スポーツ文化公園 彩の国くまがやドームで行われる「第15回電動車椅子サッカー関東大会」を後援することを決定した。本大会は、日本における電動車椅子サッカーの普及振興、技術向上を図ることを目的に開催している。

ニッポン“きずな”ウオーク～KIZUNA～を後援

Jリーグは7月19日に開催した理事会で、10月2日（日）～11月3日（木・祝）に行われる「ニッポン“きずな”ウオーク～KIZUNA～」を後援することを決定した。本運動は、このたびの東日本大震災で被害を受けた同年代の子どもたちを中心に行う支援活動として、東京から青森まで、800kmを超える道のりをたすきリレーで歩くことで支援のきずなをつないでいくことを目的に開催される。さまざまな被害の中でたくましく生き、未来のニッポンを担っていく子どもたちの支援、特に子どもたちの教育環境、支援を目的とした基金への参加を目指したウオーキングとなる。

Report リポート 中国サッカーフォーラム

「中国サッカーフォーラム」に参加する川淵三郎JFA名誉会長（左から3人目）と中西大介Jリーグ事務局長（同4人目）

Jリーグ初代チェアマンの川淵三郎JFA（日本サッカー協会）名誉会長と、中西大介Jリーグ事務局長が「中国サッカーフォーラム」（7月5日・北京）に招かれ、Jリーグ創設までのプロセスや理念などを講演し、討論会にも参加した。

世界最多のテレビ視聴者を持つとされる中国だが、昨年から八百長や代表チームの成績不振などが重なり、子どもたちにも深刻な「サッカー離れ」が起きているという。そんな危機感を示すように、約150人もの報道、サッカー関係者が8時間に及んだフォーラムに詰め掛けた。

川淵名誉会長はサッカー界の歴史的転換を講演し、続いて中西事務局長は「具体的な数字へのこだわりこそ、プロリーグの使命」と観客数、収支など実数をあげながら現場の運営を解説した。

フォーラムはネット中継され、大画面にはツイッターが次々に入ってくる臨場感あふれるものに。「全クラブが収支を公開する点を見習うべき」といった提言のほか、「大学生だが、Jリーグで研修できないか」などの声も上がり、今後の日中サッカーの関係に新たな可能性を感じさせる交流となった。

（スポーツライター　増島みどり）